
えっ？平凡ですよ？？

はな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えっ？平凡ですよ？？

【Nコード】

N3791W

【作者名】

はな

【あらすじ】

私の名前はリリアナ・ラ・オリヴィリア。オリヴィリア伯爵の第一子です。実は元女子高生な私が貧乏伯爵家に新たに生をうけ、ただただ今生の家族と自分が左団扇に暮らせるように現代の知識を活用していくうちに、自分が周囲からどう評価されてるにも気付かずに平凡な今生を望む転生者の呟き。

女子高生 橘 ゆかり

私の名前は、橘 ゆかり。

公立高校に通う女子高生です。

うちは母子家庭で、お母さんが女手一つで育ててくれた。

お父さんは、私が生まれる前に交通事故で亡くなっている。

当時のお母さんは、精神を病み私を流産しかけた事もあったらしい。

だけど、いつもお母さんの周りには人がいた。

お母さんの事を心配した親族や友人、職場の人達。

そして私が、お母さんのお腹の中に常に一緒にいた。

お母さんは人の優しさに触れ、徐々に生きる気力を取り戻し、私を産んだ。

そして、素敵な名前をつけてくれた。

- - - ゆかり - - -

私がお母さんのもとに、産まれてきたのも運命という縁。^{ゆかり}

そして、人と人の縁。^{ゆかり}

それを、大切にして欲しいとの願いを込めてつけられた名前。
お母さんは、ちょっと照れくさそうに話してくれたよね。

お母さんありがとう。

そして、お母さんごめんなさい。

私は、お父さんの似なくていい所が似てしまったみたい。

私は、今日車に轢かれた。

どうか、またお母さんに人の縁が集まりますよう。

それが、橘 ゆかりとしての最期の記憶。

x x x

目覚めたらそこは、知らない天井でした。

えっ？　ここ何処？？

同時に、車が私に突っ込んできた記憶がよみがえる。

あつ私……事故にあつたんだ……………。

と、いう事はここは病院かな？

まさか助かるなんてさすが私。

間違いなく、お母さんに心配かけちゃったな。

うん、謝り倒そう。

とりあえず、体を起こそうとするが何故か起きない。

事故が事故だったから、足や肋骨が折れてるのかもなあ〜と思つたが、痛みはまったくくないのが不思議だ。

今度は、自分の体の状態を確認しようと、手を動かしてみた。すると、視界に随分と小さな手がうつりこんだ。

こんな所に赤ちゃん？

なんて思っていたら、今度は20歳前半位の外国人美女が、憔悴仕切った様子で近付いてきた。

何故に外人さん？？

しかも、白は白でもワンピースを着てるから看護婦さんじゃない。美女は、私を笑顔で覗きこんでいる。

「
*
○
¢
£.
§
」

なんて言ってるんですか――！？

明らかに日本語じゃないよ。

むしろ日本語だとしたら、私の日本人歴16年全否定。

英語？

でも知ってる単語なかったよ。

もしくはネイティブ過ぎてわからなかったの!?

「というか、この状況は何！？」

状況を理解する為に、美女を観察しようと彼女の大きな瞳を見つめる。

美女の瞳には、ちっちゃな赤ちゃんが映し出されている。

えっ？ 赤ちゃん？？

美女の視線は、真っ直ぐ私に向かっている。

私と美女の間に赤ちゃんなど勿論いない。

「おぎやあ - - - ! ! ? ? (えええええ - - - ! ! ? ?) 「

×××（後書き）

美女の言葉の意味を理解出来ない内容へと変更させていただきました。

オリヴィリア伯爵令嬢 リリアナ 1

私の名前は、リリアナ・ラ・オリヴィリア。

そして、私には過去にもう一つ名前がありました。

- - - 橘 ゆかり - - -

察しのいい皆様ならお分かりでしょう……そう、私は異世界に転生したのです。

そして、あの時の美女は私の今世でのお母様でした。

赤ちゃん時代は元16歳には辛かったです。

羞恥プレイな葬り去りたい過去です。

しかし、なにより苦労したのは言葉。

こちらの言葉を喋ろうとしても、日本語を言語としていた私には、外国語にしか聞こえなかったのだから。

そうなんです。

地球とは違う言語が、使用されていたんです。

日本語が今は失われた古代語だったとか、おいしい展開はありませんでした。

最初から0の状態スタートの子供は、リンゴをさして「リンゴ」「

と覚えればいい。

しかし、私はリンゴをさして「リンゴ」という単語をまるで英和辞典を引くかのように、日本語の『リンゴ』と繋ぎ合わせなければならなかった。

前世の記憶がある為に生まれた弊害。

文字もまた一緒だった。

だから私は、3歳でようやく一つの単語、それもマーマ、パーパレベルしか喋れなかった。

単語数もそれ程多くない。

心配したお父様やお母様は、私にいっぱい喋りかけてくれた。

そして、7歳でようやく言葉を喋れるようになりました。

文字はまだ怪しいけどね……。

その頃になって、自分の立場がようやくわかるようになりました。

なんと、私貴族の伯爵位の娘として生まれたみたいです!!

こりゃ左団扇だわぁ　生活も安泰でなにより。

……ん?　……うちボロくない??

オリヴィリア伯爵令嬢 リリアナ 2

原因わかりました。

私の今世の両親は、揃いも揃ってかなりのお人好しでした。

商売をしたいが、元手がないという青年には、契約書もなしに金を貸し、持ち逃げされて行方不明。

怪しげな商人に、いい話があるが出資してみないかと言われれば、素直に出資して大損。

等々etc……。

学習能力ありますか?? と、思わずツツコミたい。

私の両親は二人とも見た目極上、性格よし、聡明。

なのに、少し考えれば分かる嘘もお人好しフィルターがそうさせるのか、すぐに信じて騙されてしまう。

お陰で豊かな大地の領主でありながら、我が家は気付いたら火の車。

けれど、そんなお人好しな両親を私は嫌いじゃない。

むしろ大好きだ。

最低限しかいない、我が家の使用人の噂話を盗み聞きすると、貴族という位についている人は大概、人を人と思わない人が多いらしい。

元日本人な私は、人権問題なんて歴史や漫画、小説の世界の話でしかなかった。

身近に感じた事もなかったが、それが慣例になっているこの世界

で、当たり前人に人と感じ、対等な立場で接する両親を誇らしく感じる。

火の車なものも、騙されたものもあるが、残りのお金を領民の生活が豊かになるよう、すべて領地に注いでいるからだ。

お父様は、毎日領地の査察をかかさず行い、時には畑まで耕す。

貴族の夫人は、家の事などしないのに我が家は、毎日お母様が家事をする。

そして、たくさんの愛情を私に注いでくれる。

そりゃあ、子どもとしてはそんな両親のお手伝いしたいじゃない???

私が、こうして前世の記憶持ちとして生まれたのも、意味があるのだと思っている。

前世では、親孝行できなかった自分。

元日本人としての知識、活用させていただきます!!

オリヴィリア伯爵令嬢 リリアナ 2（後書き）

これからリリアナの奮闘？がはじまります（＜―＞）

豊穰の娘 リリアナ

今日は、フィルアという農村にお邪魔しています。

何故かって??

意気込んだのはいいけれど、何から手をつければいいのか分からなかったからです……。

そして、今さらですが私は家から出た事ありませんでした。

家のまわりで遊んだり、探検したりはしましたよ。

だけど、それ以上出た事はなかったんです。

なにせ、言葉を習得するのに必死でしたから。

そんな私は、歴史やこの世界の有り様を知りませんでした。

むしろ、現状の確認が必須じゃない??

なので、領地の査察に行くお父様に、私も行きたいとおねだりをしてみました。

「リリアナ、遊びに行くんじゃないんだよ?」

お父様の弱点など、この7年でお見通しだ。

くらえ、私の必殺技を――――!!

目を潤ませ、下からお父様を見上げ、首をかしげ、指を組んで顎の下に添える。

このお願い攻撃は未だに負け知らず。

もちろん、私の不敗神話は更新されました。

我ながら将来が恐ろしい。

今日の査察は、うちから一番近い農村。

遠方じゃないから、私を抱えたお父様と一緒にの馬に乗りながら、ゆっくりやってきました。

同行者は、騎士のアレスさんです。

アレスさんは、飄々とした雰囲気のお兄さんで、お父様の補佐官でもあります。

フィルア村は、森に囲まれた閑静な農村で、家も30軒程の小さな村です。

その中でも、他の家より大きな家の前に立つとドアをノックする。

「ようこそお出で下さいました領主様。そして、アレス殿。今日は、随分とかわいいお連れ様も一緒ですね」

人の良さそうな、朗らかとした男性がドアから現れた。

「お久しぶりです、ダグラス村長。今日は、娘のリリアナと一緒に行きたいと駄々をこねまして。リリアナ、彼はこのフィルア村の村長のダグラスさんだよ」

「ダグラスさんはじめまして、リリアナです。今日は、よろしくお願い致します」

村長さんは、小さな私にも笑顔で応じてくれた。

お父様と、領民の関係はどうなんだろうと気にしていたが、心配損だったみたい。

まあ、領主がお人好しのお父様だしね。

「査察をしている間は、小さなお嬢様には退屈でしょう。私の娘と一緒に遊んでいただけませんか？　娘もリリアナお嬢様と同じ年なんですよ。この村には、娘と一緒に年頃の子がいないので喜ぶでしょう」

えっ？

村長さんはそう言うと、家の奥から少女を連れてきた。

少女は、チョコレート色の髪とくりつとした瞳をした可愛い雰囲気の子だ。

だけど、人見知りをするタイプだったみたいで、私を見て固まってしまった。

「はじめまして、リリアナと言います。あなたのお名前は？？」

少女は、バネで弾かれたみたいにビクツとしたら、頬を染めて笑顔になった。

何、この可愛い小動物。

ぜひともお持ち帰りしたい。

「私の名前は、ミーナっています」

「ミーナちゃん、一緒に私と遊んでくれる？？」

のほほんと二人で和んでいたら、じゃあいい子にしてるんだよ、と言ってお父様とアレスさん、村長さんが査察に行ってしまった。

あれっ？　私なんの為にきたんだっけ？？

すると、ミーナちゃんは私を家の中へ引っ張って行く。

「リリアナ様、何して遊ぶ??」

「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナって呼んでよ」

「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びしなさい、って言ったもん」

「私が、リリアナで良いって言ってるんだから、これからはリリアナって呼んでね。私はミーナちゃんって呼ぶから」

ミーナちゃんは、嬉しそうに私の両手を握り、リリアナちゃん何して遊ぶ? と、目をキラキラさせながら、うかがってくる。

隠れんぼは二人でやるよりもっと大人数の方が楽しいし、トランプをやるにもこの世界におそらくトランプなんてないし、さてどうしよう……。

結局、あやとりにしました。

自分の発想力のなさに、げんなりです。

それでも、ミーナちゃんはあやとりは初めてだと言って、楽しそうにやっている。

いい子だ。

「ミーナちゃん、この村の人はほとんどが畑を耕して生活してるの?」

「うん。獵師のおじさんもいるけど、畑で野菜とかを育ててる人の方がいっぱいだよ、リリアナちゃん」

まだなれないあやとりを、一生懸命やりながらミーナちゃんが答えしてくれる。

「森に囲まれてるし、腐葉土もいっぱいありそうだもんね。作物を育てるのによさそう」

「フヨウド? リリアナちゃん、何それ??」

「森に入った時、落ち葉の下が黒い土になってない？ その黒い土をね、腐葉土っていうんだよ」

へえ〜と言いながら、ミーナちゃんは相槌をうつ。

「落ち葉とかが腐った土で、あとは灰も畑にいいんだよ」

……確か。

「リリアナちゃんは物知りなんだね」

ミーナちゃんはキラキラした目で私をみてる。
そんな純粋な目でみられたら、間違ってるかもしれないだなんて
言えないじゃないか。

あやとりに熱中していたら、いつの間にか大人達が帰って来てました。

「リリアナ、そろそろ帰るよ」

お父様が、私を連れて行こうとしたらミーナちゃんが大泣きしはじめた。

「リリアナちゃん。行っちゃいやあ〜!!」

大泣きして、なんて可愛い事を言うんだ。
やはりお持ち帰りしたい。

「ミーナちゃん、泣かないで。私は、またお父様と一緒に遊びに来るから」

ミーナちゃんに抱きつきながら言うと、頬を真っ赤に染めながら、あのキラキラした目で見つめてくる。

「リリアナちゃん、またミーナと遊んでくれるの？」

「うん　もちろん　」

「じゃあミーナとリリアナちゃんはお友達だね！！」

ミーナちゃんは、また遊びに来てねー！　と、名残惜しそうにしながら、村の入口までダグラスさんと一緒に見送ってくれた。

私は、今世で初めての友達ができました。

あれっ？　私は何をしに来たんだっけ？？

フィルアの村娘 ミーナ

私の名前は、ミーナ・フィルアです。

お父さんは、フィルア村の村長をしていて、うちは代々続く村長の家系なんだって。

今日は、領主様の査察があるから大人しくしているんだよ、とお父さんに言われてつまらない。

領主様は優しい人で、今の領主様になって良かったって、みんな言ってるの。

前の領主様は、こわい人だったんだって。

査察にくるとき、領主様は時々ミーナにお菓子をくれるし、そんな人が悪い人なわけないもんね。

トントン、とドアのノックがした。

あつ、領主様が来たみたい。

お父さんは、すぐに領主様を迎えるために、玄関に向かった。

今日は何して遊ぼうかなあ、と思っているとお父さんが家の中に戻ってきた。

「ミーナ、今日は領主様のお嬢様もきてるんだ。領主様と村をまわってる間、一緒に遊んでくれないかい？ お嬢様はミーナと同じ年なんだよ」

ミーナと一緒に！！

この村には、ミーナよりもおっきいお兄ちゃんか、ちっちゃい子しかいない。

だから、お兄ちゃんと遊ぶといつも置いていかれるし、ちつちやい子はまだ上手く歩けないし、喋れないから面倒をみる事になるの。
初めてのミーナと一緒に年の子。

「お父さん！ ミーナその子と一緒に遊びたい！！」
「ミーナはそう言うと思ったよ。お嬢様は、リリアナ様と言っんだよ。敬語は無理でも、ミーナもお嬢様の事を、リリアナ様とお呼びなさい」

けいごが何かはわからないけど、その子をリリアナ様と呼べばいいんだよね？

「わかった！ お父さん早く早く！！」

私は、お父さんの手を引っ張って、玄関に向かう。
玄関には、いつもの優しい領主様と騎士様。
そして、初めてみる女の子がいた。

天使様だあ！！

その子は、真っ白な肌に銀色のサラサラとした髪は触ってみたいほど。

何よりも瞳が綺麗な紫色なの。

領主様も同じ紫色で、確かお父さんがアメジスト色は、領主様の家系に出る色だって言ってた。

その瞳が、すごく綺麗に輝いてるの。

綺麗な、天使様みたいな子。

本当に人間？ と、思ってたその子をずっと見つめてしまう。

「はじめまして、リリアナと言います。あなたのお名前は？？」

天使様が喋った！！

しかも、笑顔も眩しいよ。

この子は天使様みたいな人間なんだ。

「私の名前は、ミーナっていいいます」

緊張して上手く喋れないよ。

「ミーナちゃん、一緒に私と遊んでくれる？？」

天使様が、ミーナと一緒に遊んでくれるの！？

すごい！ すごい！！

じゃあいい子にしてるんだよ、と領主様が言ってみんなで出掛け
ていった。

私は、天使様の手を掴んで、家の中に連れて行く。

天使様は、普段何して遊ぶんだろ？ 聞いてみよ。

あつ、リリアナ様って呼ぶようにお父さんに言われてたんだった。

「リリアナ様、何して遊ぶ？？」

そう言つと、天使様は困った顔をした。

「ミーナちゃん、様なんてやめて。リリアナって呼んでよ」

「でも、お父さんがリリアナ様とお呼びなさい、って言ったもん」

「私が、リリアナで良いって言うてるんだから、これからはリリアナって呼んでね。私は、ミーナちゃんって呼ぶから」

天使様から名前で呼んでいいと言われました。

わあゝリリアナちゃんかあ、天使様と仲良くなれたみたいで、すごく嬉しいよ。

思わず、リリアナちゃんの両手を握りしめながら、リリアナちゃん何して遊ぶ?? と、聞いてみた。

そしたらリリアナちゃんは、ミーナにあやとりと言う遊びを教えてくれたの。

一本のヒモを輪にしたもので、リリアナちゃんの言う通りに引っ掛けたり、外したりすると、ほうきやはしこの形になっていくのが不思議で面白かった。

「ミーナちゃん、この村の人はほとんどが畑を耕して生活してるの?」

「うん。獵師のおじさんもいるけど、畑で野菜とかを育ててる人の方がいっぱいだよ、リリアナちゃん」

リリアナちゃんが、この村を好きになってくれると嬉しいなあ、と思いながら答えた。

「森に囲まれてるし、腐葉土もいっぱいありそうだもんね。作物を育てるのによさそう」

「フヨウド? リリアナちゃん、何それ??」

フヨウドなんて初めて聞くよ。

「森に入った時、落ち葉の下が黒い土になってない？ その黒い土をね、腐葉土っていうんだよ」

へえ〜と言いながら、森にある黒い土を腐葉土って言っただね、初めて知ったよ。

「落ち葉とかが腐った土で、あとは灰も畑にいいんだよ」

「リリアナちゃんは物知りなんだね」

すごいよ！！

腐葉土だけじゃなくて、灰まで畑にいい事を知ってるなんて。

やっぱり、リリアナちゃんは天使様なんだね！！

それから、リリアナちゃんとあやとりをしていたら、領主様とお父さん達が帰ってきた。

「リリアナ、そろそろ帰るよ」

領主様が、リリアナちゃんを連れて行くこととする。

「リリアナちゃん。行っちゃいやあ〜！！」

せつかく、リリアナちゃんと仲良くなったのに、お別れなんて嫌だ。

気付いたら大泣きしちゃってた。

「ミーナちゃん、泣かないで。私は、またお父様と一緒に遊びに来

るから」

リリアナちゃんは、私に抱きつきながら優しくそう言ってくれたの。

リリアナちゃんは、柔らかくて、なんだか良い匂いがした。

「リリアナちゃん、またミーナと遊んでくれるの？」

「うん　もちろん　」

リリアナちゃんがミーナとまた遊んでくれるという事は……

「じゃあミーナとリリアナちゃんはお友達だね！！」

それから、リリアナちゃんを村の入口まで、また遊びに来てね -

！　と、寂しかったけど我慢してお見送りをしたの。

家に帰ると、リリアナちゃんと遊べた事が嬉しくって、今日あった事をお父さんにお話したの。

あやとりを実際にみせたり、腐葉土や灰が畑にいいんだって知ってた？　と、リリアナちゃんの自慢話をいっぱいしたんだ。

そしたら、お父さんが腐葉土？　って、詳しく聞きたがってきたの。

普段ミーナが、お父さんに教わる事はあっても、逆に教える事なんかないからリリアナちゃんに教わった事を、そのまま教えたんだ。そしたらお父さんは、試してみる価値はあるな、とか言ってブツブツ考え始めちゃってつまらない。

まだまだ、リリアナちゃんの話聞いて欲しいのに。

しばらくしたある日、お父さんがすごいウキウキして帰ってきたの。

ミーナが、リリアナちゃんの話をした次の日からお父さんは早速、使っていない畑の一部を腐葉土や灰を使って作物を植えてみたんだって。

そしたら、成長速度も早いし、作物も大きいものが育ってきていて、収穫量が倍増しそうだって喜んで話してくれたの。

これからは、他の畑でも試してみても、良い結果がでたら村の畑のすべてに使用しようとか言ってた。

リリアナちゃんが、また村に遊びに来た時に、お父さんが試してみたら成長が良くなって、喜んでた話をしたの。

そしたら、リリアナちゃん何故かほっ、としてたの。

なんでだろ??

そして後に、リリアナちゃんに教えられた腐葉土と灰は、村の畑すべてに使用され、過去最高の収穫量となったんだって。

それを知った領主様は、オリヴィリア領のすべての村でその知識を広め、オリヴィリア領は国の食糧庫と呼ばれる事になるの。

そして、村人の誰が言いはじめたのか、リリアナちゃんの事を『豊穡の娘』と呼ぶようになり、その二つ名は、リリアナちゃんの知らない所で、じわじわと広がっていくのでした。

リリアナちゃんは『豊穡の娘』じゃなくて天使様なのに!!

フィルアの村娘 ミーナ（後書き）

知らない人にお菓子をもらっても、ついていったらダメだよ、ミーナちゃん（笑）

天使 リリアナ

もう少して、私も8歳になろうとしています。

数日後に、内輪だけでの誕生日パーティーをする事になり、その中には友達のミーナちゃんも来てくれるそうです。

ただ心配な事があります。

最近、お母様の体調がよくないんです……。

いつも眠そうで、身体がだるいみたい。

こちらでの医者にあたる治療師の方にみてもらったら、しばらくこの状態が続くので無理をせずに安静にと言われたそうです。

なので、誕生日パーティーも辞退したんだけど、リリアナちゃんがまた一つ大人になったおめでたい日なんだから絶対にやるのよ、と本人に凄い剣幕で言い切られたらやめるなんて言えなくなりました。

この家ではお母様は貴族でありながら、貧乏なので家事をします。最低限の使用人を纏めあげ、指示をする。

手があると、時間がかかりそうな担当の人を手伝ったりとなにかと働くお母様。

そのお母様が動けない今、私が働かずして誰が働く!!

と、いうことで家事のお手伝いをする事にしました。

もともと軽いお手伝いはしてきたんだけど、子供は危ないからってあんまりお手伝いさせてもらえなかったんだよね。

前世では母子家庭で、お母さんがバリバリに働いてたから、必然

的に家の事は私がやってたから家事には自信がありますよ！！

そして、私にはなんとしても改善したい事がありました。

それは料理。

この世界の料理はかなり味気ないんだよね。

良くいえば素材本来の味。

出汁も何もないスープやら、素材を焼いただけだったり。

なによりお菓子スイーツがない。

あるにはあるが、ドライフルーツがこちらではお菓子の扱いで、クッキーもケーキもないのだから涙が出ちゃう。

女の子は甘いものが好き、という言葉にもれず私も大のお菓子スイーツ好きだったのだから。

前に、料理長さんに簡単に作れるクッキーのレシピを渡してこれを作ってとお願いした事があった。

そしたら、固いクッキーが出てきた。

料理長さん……小麦粉の量が多すぎて岩石並なんですけど………
…。

料理長さんは不安そうな顔をして、私をうかがってたけど頼んだ手前、気合いで食べましたよ。

水は必須だったけどね。

あれは、いい経験だったよ。

それから失敗の原因を悟りました。

分量。

つまりは、計量カップやらの調理器具がないからあんな結果になったんだよね。

それから、ただただお菓子^{スイーツ}の為に情熱をそそいだ。

お父様にあの必殺技をしながら作って欲しいものがあるの、とおねだりをした。

まあ勝敗結果は予想通りだよ。

でも、これも豊かな食生活の為の犠牲なお父様。

そうして、出来上がった調理器具をようやくお披露目出来るわ。質素な動きやすい服を着て、調理場に現れた私をみて料理長さんは心配そうにみてきた。

「お嬢様、ここは竈や包丁を使う場所なので危ないですよ。私に任せては頂けませんか？」

「料理長さん、私はあなたの仕事を邪魔するつもりはありません。ただ、お母様が体調が悪く臥せています……幸いにも食欲はいつも通りなので、美味しい料理を食べてもらい、早く元気になって欲しくて……そのお手伝いがしたいの。ダメ？」

しゅんとした様子で料理長さんを涙目で見上げる。

「それに、試してみたい料理があるの」

そう言つて、持参した調理器具とレシピを調理台の上にひろげた。料理長さんは、不思議そうに器具を手に取り首をかしげている。

「これはね、調理器具と料理のレシピよ。これさえあれば、誰にでも美味しい料理が出来るのよ。ちなみに今日の献立はポトフとくる

みパン。そしてデザートはロールケーキよ」

料理長さんは初めて聞く料理名に不安そうだけど、絶対に美味しいのよ、お願いと言ったら渋々頷いてくれた。

「じゃあ、料理長さんはこのレシピをみただけで実行できるかを知りたいからポトフとくるみパンをお願いね。レシピの中にある器具名はこの、器具リストに器具の絵と使い方を書いてあるからそれを参考にしてね。私は、デザートのロールケーキを作るから。竈で焼くときは危ないから料理長さんに声をかけるから、その時はよろしくね」

そう言つと、料理長さんはレシピとにらめっこしはじめた。

さて、私も取り掛かりますか。

まずは、調理台が高いから椅子の上に乗りながら作業をする。

小麦粉を早速作ってもらった粉ふるいでふるう。

別のボウルに、卵と砂糖を入れて泡立て器でカチャカチャと泡立てていると料理長さんは初めてみる道具が気になるのか、自分の作業をしながらもチラチラと私の方をみてる。

が、気にせず作業を継続して焼くところまでいくと、料理長さんに竈で焼いて欲しいと頼むと笑顔で引き受けてくれた。

「料理長さん、昨日お願いしたものは？」

「ありますよ。でもこれ何に使うんですか？」

渡されたのは、乳を加熱し冷やして分離したクリーム。
スィーツ
やっぱりお菓子にクリームはかかせないっしょ。

「うふふ 出来上がってからの楽しみ」

クリームに砂糖を加えて泡立て器でかき混ぜて味を整える。
そして、竈からスポンジ生地を取り出してもらい熱をとる。

その間、料理長さんの進行具合を確認すると最初は戸惑ってたみたいだけどさすがはプロだね。

順調に進んでて美味しそうな匂いが漂いはじめてる。

さて、そろそろ冷えたかな。

スポンジ生地に、クリームを塗りくるくる巻いてさらに上にもクリームをこれでもかかってくらい塗って、最後は均等に包丁で切ろうとしたら、料理長さんが慌ててやってきて切ってくれた。

それくらい出来るのに。

最後は一切れづつにイチゴスィーツを盛り付けて完成！！

ようやく今世での初お菓子だよ！！

本当は味見したかったけれど、楽しみは後にとっておく派の私は夕食まで我慢した。

パンはもうちょっとかかりそうだな。

でもポトフは出来てるし、とりあえず片付けでもするか。

「お嬢様、片付けは私がやります。料理もあと少しで出来ますのでお部屋で夕食までお待ち下さい」

「片付け位やりますよ。それをお願いした立場としては、最後まで見届けたいし」

結局、危ないからという理由で片付けはさせてもらえなかったけれど、初めての調理器具の感想を聞きながら過ごしていたらくるみパンも完成した。

「よし、時間もいいかんじだし、料理をお母様の部屋に運んでちょうだい」

我が家では家族みなでお食事がルールなので、最近は臥せっているお母様の部屋に料理を運び家族3人で食事をしている。

「かしこまりました。奥方様もお嬢様の料理で早くお元気になりますよ」

「ありがとう。今日の料理の感想あとで料理長さんも聞かせてね」

うちは、使用人も少ないのでみんな同じ料理食べてるからね。
お菓子^{スイーツ}の感想が楽しみだな。

そのままお母様の部屋に向かうと、部屋にはお父様もすでにいてイチヤついてた。

ちなみにいつもの事なので私も乱入します。

しばらくすると料理が運ばれてきた。

初めてみる料理にお父様とお母様も興味深そう。

「お父様、お母様。今日の料理は私が考えたんです。感想聞かせて下さいね」

「リリアナちゃんの考えた料理ですって、それは楽しみだわ」

「お母様のかわりにリリアナは頑張ったんだね。ご苦労様。では、森の実りに感謝していただく」

「ありがとうねリリアナちゃん。森の実りに感謝致します」

「喜んでもらえてよかったです。森の実りに感謝致します」

こちらでのいただきますを言って、二人は料理を一口たべる。

二人の動きが一瞬止まったかと思ったら、無言で食べ続ける。

えっ……そんなに不味いかなと思って、ポトフを一口食べる。

うん、ポトフだよ。

野菜一つ一つの味がちゃんと引き立って味わい深い味に仕上がってるね。

さてさて、くるみパンはどうだろうと食べてみると焼きたてだらふわふわしてて中のくるみも美味しいよ。

……なのに何故この二人は無言なの？

こつちの人達の味覚には、前世での料理は口に合わないのか？

「お父様、お母様。お口に合いませんでしたか？ ごめんなさい

……」

そこでようやく二人は顔を上げ、私をみてくれた。

「リリアナは天才だね。この料理すごい美味しいよ。こんなに美味しい料理は初めて食べるよ」

「リリアナちゃんこれは料理の革命だね。お母様は一瞬天国をみたわ」

誉め言葉は嬉しいですが、縁起でもない事を言うのはやめて下さいお母様。

あつという間に平らげられた料理を嬉しい気持ちで眺めながら、お父様とお母様にデザートをすすめる。

「これは、デザートデザートのロールケーキです。食べてみて下さい。私が作ったんですよ」

二人は、初めてみるロールケーキを不思議そうにみたあと、フォークでロールケーキを食べた。

「ふんわりした生地に甘いこの白いのは何？ 病みつきになりそうよ。もっと表現したいのに語彙語彙が出てこないのがもどかしい程よ」
「食事でお腹いっぱいだったけれど、これは別腹だね。何個でも食べれそうだ」

前世の女子みたいな発言はやめて下さいお父様。

2人は笑顔でロールケーキを食べている。

待ちに待ったこの瞬間。

震える手にフォークを握りしめ、ロールケーキを口に運ぶ。

キタ――――！！

これだよこれ！ 苦節約8年目にしてのお菓子スイーツ！！

これまでのお菓子断ちは辛かったよ。

これからは、毎日でも食べてやる。

「お父様、お母様。これからも私が料理をしてもよいですか？？」

満場一致で料理権を勝ち取りました。

そして、数日後の誕生日パーティーでお母様が爆弾を投下しました。

文字通り爆弾を投下した訳じゃないですよ??

「リリアナちゃんへのプレゼントはこれです」

そう言つと、お母様は自分のお腹に両手を当てて笑顔で言いました。

「リリアナちゃんに弟か妹が出来ます」

「ええええ………!!」

つて、お父様まで驚いてるじゃないですか！ お母様!!

「リリアナちゃんは嬉しくないの??」

いやいや、嬉しいけどまさかの報告方法に私はビックリですよお母様。

「アリス、今の話は本当？」

「あら、ルイス。貴方まで喜んでほくれないの??」

そう言つていじけはじめるお母様。

「そんな事あるわけないだろ。リリアナという可愛い娘だけじゃなくて、もう一人私の子を生んでくれるだなんて、君には感謝してもしきれないよ」

そう言つとお母様を大切そうに抱擁し、頬にキスをする。

はい。

相変わらずのバカップルですね。

でも、私も寂しいから混ぜろ・・・と乱入する。

弟か妹が生まれる事になりました。

最近具合が悪そうだなと思っていたら、お母様は妊娠初期の症状でいつも眠そうでだるかったみたい。

治療師の方にも驚かせたいから内緒にして下さい、って口裏をあわせていたらしい。

「リリアナちゃんお誕生日おめでとう。弟か妹が出来るんだね。奥方様もなんともなくってよかったね」

ミーナちゃんは、私の手を握りながら笑顔で一緒に喜んでくれる。

「あれ、リリアナちゃん。手に傷があるよ」

「ああ、料理した時に包丁でちよつと切っちゃったんだ」

まあかすり傷だし、すぐ治るしね。

むしろ、前世で自称主婦を自認してたのにブランクがあるにしても切った事実が衝撃だったよ。

料理長さんの目を盗んでの行動だったからバレないように隠したけどね。

ミーナちゃんを見ると、まるで自分が傷ついたと思うほど悲しい顔をしている。

「リリアナちゃん、ミーナが治してあげるね。我願う、リリアナちゃんの傷を治したまえ」

傷ついた手の上に、ミーナちゃんが手をかざすとほのかな温もりを感じた。

ミーナちゃんがつこり笑って手をどかすと……あら、不思議。そこには傷も何もない手がありました。

「えええ………!!」

ミーナちゃん私に何をした………!!

天使 リリアナ（後書き）

二つ名に悩んでいたら、二つ名メーカーなるサイトを発見し、リリアナの名前を入れてみると・・・

アンダーグラウンドテリトリー
呻く領域

何をしたらそんな二つ名がつくんだリリアナ（笑）

食堂の女主　　マリア

私の名前は、マリア・シェリスタ。

はつきり言おう。偽名です。

本当の名前は、マリア・リーシェリ。

今では大きな商會に發展したリーシェリ商會の末娘として生をうけ、数奇なる運命の末に王都ローレリアにて食堂の女主として生計を立てているのだから、人生とは不思議なものである。

リーシェリ商會を束ねる父さんには家を出るとき勘当され、私は行方をくらませた。

それからもう32年。

今では立派な食堂のおばちゃんだ。

「お久しぶりね兄さん。元氣そうでなによりだわ」

生家とは行方をくらませた後、連絡をとっていなかったが数年前から私の居所を掴んだ兄さんは、時々私のもとへあらわれる。

兄さんは手に大きな箱を持ち、箱を私の目の前のテーブルに置いた。

「マリア、君も元氣そうでよかったよ。頼まれものだ」

「兄さんいつもすまないわね。様子はどうだったかしら？」

「担当の話を聞くと幸せそうにやっているらしい。誰に似たのかお人好しすぎてどうなる事やらと心配していたが」

「うふふ、それはよかったわ。随分と大きい箱ね。開けるのが楽しみだわ」

箱を開けると、そこにはみた事もない道具と紙の束、手紙が一緒に入っていた。

「兄さん、何かしらこれ？」

「何かの道具みたいだがやけにたくさんあるな。マリア、手紙を読んでみたらどうだ」

それもそうだと思って箱から手紙を抜きとり、開封する。

それは、手離さなければならなかった懐かしい息子の字で流暢に書かれた手紙だった。

母さん、久しぶりだね。

商会から母さんの手紙を預かったよ。
相変わらず元気そうだなによりだよ。

だからといって、無理して身体を壊したりしないでくれよ。

最近、妻の体調が悪くて臥せているんだ。
心配した可愛い天使は、お母様の為にといって家事の手伝いをするようになったんだ。

特に、料理への入れ込みようはすごかった。

みた事もない道具を作って欲しいと言われたから、作らせてみたらその道具は調理器具だと言った。

早速、料理長と一緒に調理器具を使って料理を作ったんだ。

不味くても、僕らの可愛い天使が作った料理だから、全部食べなければと覚悟していた。

そしたら、今まで母さんの作った料理が一番だと思っていたが、天使の料理は素晴らしく美味しくて誉める事も忘れて夢中で食べてしまったよ。

料理上手は母さんに似たんだろうね。

私達夫婦はもちろん、使用人達も料理に感激して、これは神々の食卓の料理だと絶賛していたよ。

暇さえあれば使用人達は調理室に通い、料理を教わって里帰りの時に家族に神々の食卓の料理を味わってもらおうと、必死なくらいなのだから。

そんな状況を知った天使は、みんなにレシピと調理器具をあげたんだ。

レシピというのは調理法を記したもので、そのレシピをみながら調理器具を使って料理すると、誰にでも美味しい料理が出来るらしい。

母さんにも、料理を味わってほしくて箱の中に調理器具とレシピをいれておいたよ。

あと、妻の体調が悪いと書いただろ。

天使の誕生日パーティーに妻は最高のプレゼントをあげたんだ。

なんと天使に弟か妹が出来るって言うんだ。

私達の天使が来年にはもう一人増えて、天使達になるんだ。

母さんにも、いつか天使達をみせたいよ。

読み終わると兄さんがハンカチを用意してくれていた。
息子からの手紙を読む時は、いつも涙が出てしまう。

「マリアは本当に涙もろいな」

「あら、これは嬉し泣きだからとても幸せな事なのよ。素晴らしい事に来年にはもう一人天使が増えるらしいわ」

「もう一人産まれるのか。それは、めでたいな。マリア、もう会ってもいいんじゃないのか？ あの時とは状況が違う」

私は、ハンカチで目元を拭いながら首を横にふる。

「ダメ。私は最後まで守れなかったのだから会う資格なんかないの。私のような平民と血の繋がりとわかってはいけない。本来は手紙のやり取りするべきではないのに」

私と繋がりがある事が露見してはいけない。

なのに、息子と兄さんの好意に甘えてしまって少しでも繋がりを持とうとする自分が浅ましい。

「ところで、この道具は何だったんだマリア？」

兄さんは重い雰囲気を変えるように言った。

まあ、もともと気になっていたのでしょうね。

商人の悲しい性ね。

「この道具達は調理器具で、紙の束はレシピという調理法を記したもののらしいの。この調理器具やレシピは天使が考えたんですってよ。この通りつくつたら、天使が作った味を再現できるらしいわ」

「この道具は調理器具だったのか。でも子供の考えた事だろ」

「兄さん、馬鹿にしてるの？　むこうの使用人達は、天使の料理を神々の食卓の料理と言うほど絶賛してる腕前らしいわよ」

「それは聞き捨てならないな。マリア、そのレシピから何か作ってくれよ」

「もう、仕方ないわね」

天使がつくったレシピの中から『鶏のにんにく風味ソテー』と書かれたレシピを抜きとり、記されてる通りに調理をする。

美味しくなるコツは、焼くときはオイルを多めに鶏肉がカリカリになるまで焼く事らしい。

食堂には美味しそうなにくの香ばしい匂いが充満し、兄さんは食べたくてうずうずしている。

レシピに書かれてる通り、カリカリに焼き上げると皿に盛り付け兄さんの前に皿を置く。

「これが兄さんの分ね。森の実りに感謝致します」

「随分、美味しそくないい匂いだな。森の実りに感謝致します」

同時にフォークで差した鶏肉を口にはこぶ。

口にした瞬間二人して、動きがとまり絶叫していた。

「「美味しい……！！」」

「おい、マリアこれは確かに神々の食卓の料理だ！！　こんなに上手いものは初めて食べた」

「さすがは天使ね！　これは神々の慈悲だわ。本当に天使が私達のもとへ授けて下さった料理に違いないわ」

「レシピ通り作ればこんな美味しい料理ばかりって事か？」

「手紙通りだとしたらそういう事になるわね」

「これは、王国中に広めるべき料理だ。このレシピと調理器具さえあればこの味が出来るだなんて素晴らしいすぎる。マリア、このレ

シピと調理器具をぜひ商会で販売したい」

兄さんの商魂が刺激されたい。

確かにこんな絶品料理が誰にでも作れるのだから、絶対大繁盛だ。

息子からの手紙にはいつだって幸せな事しか書かれていない。

しかし、私は噂で知っている。

かの領地経営が火の車な事も、幸せな事ばかりではなかった事も。

息子には事後承諾にはなるが、兄さんに販売の許可を出した。

もちろん利益の半分は、かの領地に納める事を約束させた。

腐っても、私も商人の娘だしね。

それからの兄さんの行動は早かった。

調理器具とレシピを私から借りるとすぐに作らせにかかった。

さすがは、ここ数十年で王国屈指と名高いリーシェリ商会を築き上げた人物の一人だ。

レシピは『天使の贈り物』という題名で、調理器具と一緒に販売された。

売り出される頃には、商会の傘下の食堂で提供されていた料理はすでに話題になっており、レシピと調理器具は即日完売。

レシピと調理器具は大量生産するも追いつかず、料理の評判は高まるばかりだ。

後に、王国の家庭に料理は浸透し、料理は王宮でも提供されるようになる。

各国の賓客は料理に舌鼓をうち、自国で我が国の料理の評判をさらに高めてくれた。

私の食堂も天使が教えてくれたレシピを店で提供し、店から感謝の絶叫が絶える事はなかった。

そして、客は必ず私にこう言うのよ。

「マリア、この料理よりも美味しいものは食べた事がない!!」
「当たり前よ、可愛い天使が考えたのだから」

記念小話 さる高貴な方のお忍び（前書き）

お気に入り登録2000件、ユニークアクセス10万人突破記念小話です。

読者の皆様、いつも小説を読んいただきありがとうございます。

これからも未熟な作者ではありますが、頑張っていきます。――
――<

記念小話　　さる高貴な方のお忍び

光あれば、闇があり。

闇あれば、光あり。

闇の部分を担い暗躍する部隊『暁』は、諜報や潜入は当たり前。その情報はどんな些細な内容でも拾い上げ、主に報告をする。

そして、今日も主の琴線に触れた情報があったようだ。

今、非常に自分の軽率な行動を後悔していた。

数人の柄の悪そうな男達が、俺の少し離れた場所から付きまとって来ているからだ。

ただのごろつきなので、相手をするのに不足はない。

しかしながらここは大通り。

そんな場所で派手な立ち回りをし、目立つ訳にはいかない。

あえて、裏路地に入って倒すかと考えていると、俺の右腕に何者か触れた。

「私に付いてきて下さい。彼らを撤きます」

右腕に触れてきたのは、品の良さそうな40代後半位の女性だった。

予想外な出来事に呆気にとられていると、女性は俺の手を引っ張

り大通りに面した、あるお店に入っていく。

さすがに、柄の悪そうな男達は店の中までは入って来なかった。店は服飾店だったらしく、ところ狭しと服や生地が並べられている。

そして、服に埋もれるように一人の老婆がいた。

「店主お久しぶりね。悪いけど、裏口を借りるわ」

「久しぶりに若い男を連れて顔をみせたと思っただら訳ありかい。いいよ、使いな」

「ありがとう。今度は、ちゃんと話しにも付き合ってから今日は許してちょうだい」

老婆からの許可をもらうと、女性は客のいない店の奥に進みだし、俺の背の半分ほどしかない小さな扉の前に立った。

「これが、裏口になります。扉を出ると、先程の大通りからのびている小さな小道に出ます。小道を左に真っ直ぐ行くと、大広場に出ますので、そこまで行けば道も分かりましょう。御身は唯一の存在なのですから、ご自重下さいませ」

「俺の正体がわかっていてるみたいだな。何故分かった」

女性は、口元に手の甲を持っていき微笑んだ。

「変装はお見事です。しかしながら完璧過ぎるのです。一般の者にはわからないでしょうが、力がみえる者にとっては、元の姿をみる事が全く敵わない人物となると限られるのですよ。ちなみに、先程のようなごろつきに目を付けられたのは、挙措が優雅すぎるのです。下に降りられる際は、変装だけでなく、粗野とまでは申しませんが平民の動作を身に付けるべきです。でなければ、今回のようなごろつきならばまだ良いですが、後ろに余計な者を連れてきてしまいま

す。以後、お気をつけ下さいませ」

女性はそう言うと、王宮の淑女よりも上品で流麗な動作でお辞儀した。

「お気遣い感謝する。貴女も色々訳ありだな」

「私は、ただ人より勘が良いだけにすぎません」

「この分だと料理は無理そうだな」

今回の目的を断念する言葉を口にする。

すると、女性は体をピクツと震わせ反応する。

「料理と言いますと、まさかあの？」

王都ローレリアでは、最近話題になっているものがある。

それは料理だ。

王国屈指の商会と名高いリーシェリ商会が発売した、レシピと呼ばれる調理法が記された『天使の贈り物』という本と調理器具が大人気で入手困難になっているらしい。

その本に掲載されている料理は、神々の食卓の料理に違いないと絶賛されているという。

一度は食べてみたい。

そう思った俺は、変装して市井の生活をのぞきみる事も兼ねて、その料理が提供されている食堂へ向かっていた。

結果は、自らの行動を後悔する事になったただけだが。

「ああ、巷で今話題の『天使の贈り物』がどのようなものか食そう
と思ったんだが……また出直すでしょう」

女性は、長い溜め息をついた後にだからお人好しとか血は争えな
いとか言われるのよとブツブツ呟いたかと思ったら、俺に向けてに
こやかに微笑んだ。

「私はただ勘が良いだけでなく、ただの食堂の女主でもあるのです。
どうせここまで来たのですから、私が可愛い天使の料理を振る舞い
ますわ」

そう言って、小さな裏口の扉は開かれた。

その日、『暁』に密命が下る。

リーシェリ商会の『天使の贈り物』と調理器具を入手せよと。

記念小話 さる高貴な方のお忍び（後書き）

かくして、上流階級に料理は浸透していくのでした（笑）

小話なのでちょっと遊んじやいました。

次回は本編に戻ってリリアナのターンとなります。

神童 リリアナ 1 (前書き)

話が長くなったので、区切りのいい所で一話にしたので短いです。

ご容赦下さいませ。(――) <

神童 リリアナ 1

この世界には魔法がありました。

「すごいよミーナちゃん何したの？　まるで魔法みたい！」

ミーナちゃんが、私の傷を治したのに驚いて思わず冗談で言ってみた。

「もちろん魔法だよ」

ミーナちゃんは頷くと、当たり前のように言う。

「すごい！　すごいよ！！　じゃあ魔法で空を飛んじったり、いろんな事が出来ちゃったりするの？」

私は興奮状態。

だって、魔法なんておとぎ話とか本の中でのお話で、魔法が使えるならあつて絶対一度は思った事あるでしょ？　それが実際に使えるなんてすごすぎる。

「うーん。力がかなり強い人なら空も飛べるらしいよ。魔法は、誰にでも使えて人それぞれだから、確かにいろんな事ができるかもね」「そうなんだ！　じゃあ私も、もしかしたら空を飛んだり、ミーナちゃんみたいに傷を治したり出来るかもしれないんだね！」

私は、ミーナちゃんの両手を掴んで、まるで獲物を追いかける捕獲者のように詰め寄った。

「ねえねえ、どうやって使うの？ 私も使いたい！！」
「……リリアナちゃん、もしかして魔法の事知らないの？？」

ミーナちゃんが戸惑いながら言う。
その言葉を聞いた途端興奮から一転、冷水をかけられた気分になった。

この世界では、魔法を使える事は常識だったみたいです。

前世では魔法は空想の中での話で、現実ではなかった。
だから、私は使えない事が当たり前だと思って、知ろつともしなかった。

私は、この世界の事を何も知らない。

私は伯爵家の娘として生をうけた身。
貧乏伯爵家とはいえ、領民の働きのもと、私は今の生活を享受している。

私達の為に領民がいるのではない。
領民の為に私達がいる。

何も知らないで、誰かを救う事など出来るはずがない。
だから、今後もし知らなかったでは済まされない。
知らない事が罪なのだから。

それが、高貴なる者のノブレス・オブリージュ義務だ。

私は、両親の手助けをすると決めた時、現状の確認が必須と言ったくせにこの1年何をしてきた？

ミーナちゃんと遊んだり、料理のレシピを思い出せるだけ書き出してみたり、結局は何もせず毎日が無駄に1年過ごしていた。

このままではいけない。

その日は眠れない夜となった。

翌日、私は決意を胸にお父様の書斎を訪ねた。

「お父様にお願ひがあります。私、勉強をしたいです。この世界の事を知りたいです」

「リリアナ、突然どうしたんだい？」

「お父様、私は何も知らない事を知りました。この世界には魔法がある事すら知らなかったのです。自分が恥ずかしいです」

私が、しょんぼりしていたらお父様が手招きをしてきたのでお父様が座っている椅子に近寄った。

お父様は少し屈んで、私と視線を合わせてくれた。

「じゃあ家庭教師を雇おうか。リリアナは偉いよ。ちゃんと知らない事に気付いたのだから」

「お父様は優しすぎます」

お父様は、知らないからそうやって優しい言葉をかけてくれる。

本当は私、精神年齢はもう24歳なんですよ。

そつはみえない位に未だに子供だけど。

「でも、家庭教師なんか大丈夫なんですか？」

忘れてはいけなのが我が家が貧乏伯爵家という事実だ。
さりげなく、お金の心配をしてお父様をうかがう。

「リリアナはそんな心配しなくていいんだよ」

「変な心配をしてごめんなさいお父様」

「いや、私こそリリアナに謝らなければならない。ごめんよ」

そう言つと、お父様の大きな手が私の頭を撫でてきました。

前世では、こんな風に男性に頭を撫でられた事がなかったから、
ごく、くすぐつたい気持ちになる。

「ちょうど、私の恩師のお弟子さんが王都にいらなくなつたから、
良い働き口はないかつて相談されていたんだ。その人にリリアナの
家庭教師を頼もう」

お父様……王都にいらなくなつたって問題じゃないですか。

家庭教師の件は嬉しいですが、本当にその方大丈夫なんでしょう
か……。

神童 リリアナ 2

家庭教師としてやってきたのが、目の前の青年だ。

「私は、シリウス・レオドルです。今日からお嬢様の家庭教師を勤めます」

「はじめまして先生。レオドル先生とシリウス先生のどちらで呼びすればいいですか？」

雰囲気的には、名前で呼ぶより姓であるレオドル先生で呼んだ方が良さそうなタイプだけどね。

先生は、黒髪と藍色の瞳の持ち主で、顔立ちは冷たそうな印象の美形な25歳の青年でした。

オプシヨンで眼鏡とか似合いそうな人です。

残念ながらこの世界には眼鏡がないのが悔やまれます。

それにしても、この世界の人は皆さん美男美女ばかりで、レベルが高いです。

「レオドルでお願い致しますお嬢様」

あつ、やっぱりね。

「私はリリアナと申します。これからよろしくお願い致します。レオドル先生」

先生は、一体何をして王都にいられなくなったのか気になるけど、人には聞かれたくない事もあるからね。

冷たそうな印象だけど、何となく悪い人じゃないと思うんだ。

「レオドル先生。私は恥ずかしい事に何も知らないのです。世界の成り立ちも何もかも」

「お嬢様は、自分が無知な事を理解しています。その様に言うのも勇気がある事です。知らないのに知ってるように振る舞う事こそ愚か者ですよ」

「だって聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥ですから」

「その言葉は……？」

先生は不思議そうに聞いてきた。

「知らない事を聞くのは恥ずかしいですが、知らないままでは一生恥ずかしいという意味です」

「なるほど。一理ありますね。リリアナお嬢様、席にお座り下さい。勉強をはじめましょう。まずは、この世界がどの様に出来たのか神話をお話しましょう」

神は嘆いた。

この世界で一人である事に。

神の一滴の涙の雫が、頬を伝い流れ落ちると、大地の女神と海の男神が誕生した。

その時、神は創造する事を知った。

願いに想いと力が重なり合うと叶う事を……。

その瞬間、神は一人ではなくなった。

神は創造を続けた。

世界に光を与える太陽の男神や、安らぎを与える夜の女神といっ

た神々を。

創造神たる神が寂しくないように、子である神々も子を産み数多なる神が誕生した。

創造神は、大地に動物や草花なども創造した。

やがて、自らの姿に似せた人を創造した。

しかし、人は一人で生きていくには弱く脆い存在。

そんな弱き人へ、創造神は願いを叶える力を与えた。

それが魔法だ。

魔法の力を使い人は繁栄した。

人は自らを創造した神と神々を崇拜し、神々も人を自らの子のよ
うに愛し、助けた。

神の寵愛が深い者はより強い力を持ち、神の愛し子と呼ばれた。

神の愛し子のもとへ人は集い、国となり、大陸に多くの国々が建
国した。

神は自らの愛し子が建国せし国に、加護を与えた。

しかし人は欲深く、更なる大地と力を求め、神々を交えた争いが
勃発した。

創造神は嘆いた。

自らの子同士が争いあう事を。

創造神にとって創造した神や人は、等しく自らの子だったから。

創造神は神に地上へ降り、直接力を振るう事を禁じた。

人へは国境を越え争う事を禁じた。

掟を破る者には制裁を加えた。

創造神は、力を取り上げたのだ。

それは魔法の力と加護の消失を意味した。

願いは叶わず、加護は失われ、大地と人心は荒れていった。

人は自らの行いを悔い改めた。

そして、人はまた願う。

豊かな大地で平和に暮らしていたあの日々を。

願いは天まで届き、創造神は慈悲を与えた。

過ちを繰り返す事なかれ。

さすれば加護を約束しよう。

しかし、また繰り返す事あれば、再び大地に混沌が訪れる。

神の名を呼ぶことなかれ。

神は人と大地に加護を与える事は出来るが、地には降りる事が叶わないのだから心を揺り動かす事を許さず。

人が呼んで良い名はただ一つ。

我、セイルレーン創造神のみ。

世界の名はセイルレーン。

「こうして、神々の名は秘されました。各国にはそれぞれの神の加護があり、私達人は神の教えを守る事で魔法を使う事が出来るのです」

願いを叶える力なんて凄すぎます。

やっぱり魔法は必修だね。

「ちなみに、私達が住んでいるこのシエルフィールド王国は美と愛と豊穡の女神に守護されている国です。それ故にこの国の加護は他国と比べ、見目麗しい者が多く、作物なども収穫量が多くなっています」

美形が多いのは、お国柄だったんですか先生！？

道理で美形が多い訳ですよ。

謎が一つ解決しました。

「他国では知恵や工芸、学芸の女神の加護は知能が高く、それ故に知略に優れています。が体力はありません。戦いの男神の加護は、力が強く体力はありますが、逆に知には劣ります。わかりやすい例はこんなところで、他にも様々な加護を受けている国があります。お嬢様、何か質問はありますか？」

はい、先生の話の展開が早すぎます。

私が本当の意味で8歳だったら絶対理解出来てませんからね、先生。

「レオドル先生、地図はありませんか？ 実際にみてみなければ他国との位置関係が難しいです」

「それもそうですね」

先生は、教材等を入れていた箱の中から見慣れた物を取り出し、私の目の前に置いた。

「地球儀！？ いや、でもここはセイルレーンという名の世界だからセイルレーン儀？ でも世界の大地が球体である事は変わらないから地球儀でいいの??」

先生が取り出した物は地球儀でした。

球体の部分をよく見ると、やっぱり前世と大陸の形が違う。

そして、大陸の形が不自然なまでに大きい。

おそらく、認知されていない大陸とかがあって、その部分がごっそり抜けてしまってるからなんだろうな。

そんなふうにと考えると、レオドル先生がいきなり私の両肩をガシツと掴んできた。

「何故、世界が球体である事を知っている」
「えっ？」

世界が球体である事を知っているはおかしいという事は……。

世界は丸い。

恐らくまだ、このセイルレーンでは世界が丸い事が立証されていないんだ。

立証されていなければ、球体じゃなくて、半円球や平たいと思っても不思議じゃないのだから。

いや、でも美形がお国柄とか言っちゃう世界だから変な形でもおかしくないのかも。

あと、先生の口調が変わったけれどそれが素なのかな？

「レオドル先生は、どうして球体と思ったのですか？」

「船で沖から陸に近付くと、遠くに見える山の頂といった高い物から先に見え、裾野は陸地に近付かないと見えないからだ。あとは、月の神隠しで隠れるのが球体だ。だから、世界は半円球等ではなく球体だと確信している」

「月の神隠し？」

神隠しって突然行方不明になる事だよね……。

「年に一、二回位しかないが、月が黒い影に隠れていく現象だ。月が全部隠れる時もあれば、部分的な事もある」

「ああ！ 月食ですね！！」

「月食??」

「先生が言っていた、月の神隠しの現象の事です。太陽を軸に世界

は回っていますが、太陽とセイルレーン、月が一直線に並ぶ為にセイルレーンの影が月にあたり、明るさを失った状態の事ですよ」

丸い事を証明しなさいと言われても、宇宙から世界をみたら丸いと言えるけれど、この時代に宇宙船なんかあるわけないもんね。

確かに、先生の言った内容で球体だと言える。

説明しなさいと言われても、簡単そうで意外と難しいのに先生は凄いい。

先生は、私の両肩を掴んだ手をゆつくりと離していく。

「……地動説か。それは私が説き、王都にいれなくなった原因だ」

地動説！ 先生は、異世界版ガリレオ・ガリレイなんだ！！

先駆者の多くは、世の中から初めは認めてもらえず誰もが笑った。けど、先生は決して笑われていいような人なんかじゃない。

先生は正しい事を説いただけなのだから。

「レオドル先生。人は、半歩か一步先の事は受け入れる事が出来ます。しかし、飛び越えた先はわからない為に人は受け入れる事が出来ないものです。先駆者とは、世の中の流れに逆らう者が次の流れを作り出すのです。時代が進み、技術が進歩すれば先生が正しい事は証明されます」

だから私は世界が球体である事も、太陽を中心に惑星が軌道を描いている事も知っているのだから。

「私、レオドル先生に師事出来る事になって良かった。先生のよくな貴重な方に、これからたくさん事を教えていただけるのかと

思うと嬉しいです。王都で先生の価値をわかっていない人達など、ざまあみろです。でも、先生を独り占め出来るのですから、私は役得ですね」

先生はぼかんとしている。

美形な先生には、そんな表情似合わないと思っていると、先生は両手をお腹にあて、くの字になっていきなり大笑いしはじめた。びっくりして今度は私がぼかんとしてしまう。

「お嬢様、口が悪いですよ。それにしてもこんなに笑ったのは初めてだ」

私は頬つぺたを丸くして、先生を睨みつける。

「そんなに笑わなくてもいいじゃないですか。私は、思った事を正直に言っただけです」

笑いがようやく治まった先生は、さっきの大笑いが嘘のように姿勢を正し、私を見つめてきた。

「口が悪いお嬢様には、確かに教育が必要です。私は、王都に戻る事はしばらく出来ないのです、これから長い付き合いになりそうです。ですから、やはりレオドールではなくシリウスとお呼び下さい」

「シリウス先生ですね。では、私の事もお嬢様ではなく、リリアナと呼んで下さい」

「リリアナ様と呼ばせていただきます」

私はにつこりと笑って、先生に右手を差し出した。

「シリウス先生、これからよろしくお願い致します」

シリウス先生も自らの右手を差し出し、私の右手を握ってくれた。

「リリアナ様、こちらこそこれからよろしくお願い致します。そして、ありがとうございます」

そう言って笑った先生の笑顔は、とても穏やかだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3791w/>

えっ？ 平凡ですよ？？

2011年10月8日03時10分発行